

桶川市協働推進提案事業

私たちの桶川一町の成長とお祭りー

私たちの桶川 ー町の成長とお祭りー

はじめに

今、私たちが生きている桶川市は、400年ほど前の江戸時代に、桶川宿として始まりました。
桶川の町が大きく豊かになっていく中で、人びとが桶川祇園祭を大切にしてきた物語をお伝えします。



子どもばやし (本街保存会)



子どもばやし (栄会)



子どもばやし (八雲会)



子どもみこし

市（いち）の始まり

今、桶川中学校があるあたりは、古い桶川の地図に「一騎堀（いっきぼり）」と記されています。また、今から500年前の戦国時代の記録には「いっきぼり」で市（いち）が開かれたと書かれています。

「市」とは、人びとがお米などの農産物や炭や布などの暮らしに必要なものを持って集まり、売り買いする所です。また、市には遠くから運ばれてきためずらしい物もあったことでしょう。

いっきぼりの市が開かれた場所は、むかし、鴨川（かもがわ）が流れ出す沼のほとりで、さみしいところであったようです。でも、日を決めて開かれる市の日ばかりはにぎやかになったことでしょう。

今日は、市が開かれる日です。

池のほとりにある大きな木の近くに、小さな神社がまつられています。山伏（やまぶし）がほら貝をふきながら神社の前に進むと、市に集まった人もそれに続きます。山伏は杖（つえ）を振りながら、神様に市を開くことを告げると、人びとは地面に品物を並べて、お客に声をかけはじめます。

お米を売る人がいます。女の人は自分でおった布をすすめているようです。市の日、商人もお百姓も、そして武士もほがらかに声をかけあっています。

槍（やり）をかついだ武士がこんなことを話しています。

「家康（いえやす）さまが江戸にきたおかげで戦（いくさ）も終わりそうだよ。もうすぐこの近くでは、見たこともないような広い道と町づくりが始まるようだよ。」



町づくり —中山道と桶川宿—

100年以上も続いた戦いの時代が終わって、徳川家康が慶長（けいちょう）8年（1603年）に将軍になると、江戸時代が始まります。

人びとは、戦いをやめ、町づくりにはげむようになりました。江戸には、大きなお城がつくられ、日本中からたくさんの人びとが集まり、大きな町もできあがっていきました。

徳川家康は、日本のあちこちと江戸を結ぶ道をつくり始めます。京都や大阪と江戸を結ぶ東海道と中山道はとくに大切な道でした。曲がりくねった細い道は、まっすぐに直して道幅を広げ、今でいうと高速道路のように立派な道としたのです。そして道ぞいに旅人が泊まる町をつくることにしました。徳川家康からこのたいせつな仕事をまかされたのは伊奈忠次（いな ただつぐ）です。

江戸から中山道を通って北に十里（40キロメートル）。ここに、江戸から6番目の町となる桶川宿をつくることになりました。

新しい町づくりに参加した人たちはどんな人たちだったのでしょうか。平和になって戦うことをやめた武士、戦いの中でふるさとをはなれたお百姓、そして道や家をつくる人びとも桶川にやってきました。

南一丁目の浄念寺（じょうねんじ）にある太子堂（たいしどう）は、町づくりのできごとを伝えています。

太子堂の中には江戸時代はじめの聖徳太子（しょうとくたいし）の木像があります。前にある石の塔（とう）には、西尾吉次（にし およしつぐ）が桶川宿を開いたと書かれています。



今でも、年の初めに、桶川の大工さんたちは太子堂に集まっておまつりをします。太子堂は、桶川宿の町づくりに集まった人びとの守り神だったのかもしれないね。

伊奈忠次様と西尾吉次様が相談をしています。

「ここは江戸から十里、江戸までの玄関口となる宿場をここ桶川に新しくつくろうと思うがいかがだろうか。」「それはよい。ここから、西に向かうと川越城（かわごえじょう）にも近いし、荒川を使って材木や石を運ぶこともできる。」

「では、西尾殿は宿場に住む人たちを集めてほしい。町の名主（なぬし）をだれにまかせたらよいだろう。」「福井からやってきた大野秀利（おおのひでとし）とその子甚右衛門（じんえもん）にまかせてはいかがだろうか。武士として人びとをまとめたことがあり、ふさわしいだろうね。」

桶川宿ができあがったところの家数は58軒であったと記録されています。町は、まだまだにぎわいも少なく、さみしいところだったようです。

このころの桶川宿の人びとは、中山道を通る人たちのために、馬や人が荷物を運ぶ仕事についていました。旅人は、江戸に行くことが必要な武士、それにお坊さんや商人などで、旅を楽しむ人はまれでした。

旅をする大名の妻（つま）が、桶川にとまったものの、さみしいところであったと日記に書いています。



〔町探検〕

○浄念寺（じょうねんじ）

中山道から赤い門が見えます。ここは、浄念寺です。

この門は、桶川宿では一番古い建物で、門の鐘（かね）は、桶川宿の人びとに時間を知らせる鐘でした。

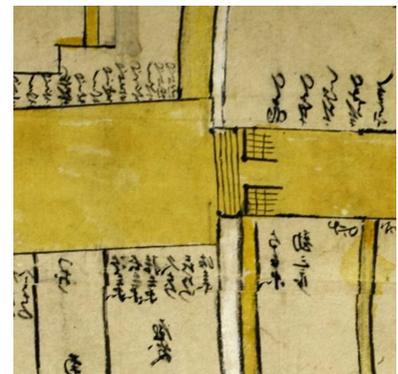
門から中に入る右側に小さな太子堂があります。この中に大工さんたちが大切にしている聖徳太子の像があります。



○木戸跡（きどあと）

桶川宿の入口には、木戸がありました。夜になるとこれをしめて、町にくらす人たちが安心して休むことができるようにしていたのです。江戸時代のはじめに描かれた桶川宿の絵には、木戸が描かれています。

今、木戸があったところには、「木戸跡」と書かれた石が建ててあります。



町が大きくなり、お祭りがはじまる

平和がつづき、中山道を通して旅をする人たちが多くなりました。今から 300 年前、江戸時代の中ごろになると、江戸に向かう大名の行列や武士たちばかりではなく、伊勢神宮（いせじんぐう）や善光寺（ぜんこうじ）など遠くの神社やお寺におまいりする人たちも多くなってきました。

また、江戸と京都や大阪の間を行き来する商人たちの姿もよく見かけるようになりました。商人の中には、桶川の町に住みつき、店を開く人もあらわれました。町ができて 100 年ほどの間に、桶川宿の家の数は 3 倍に増えて 200 軒を超え、1000 人以上の人びとが暮らす町になりました。

平和な時代でも、災害は人びとを苦しめます。桶川宿でも大きな火事がおき、夏に伝染病がはやったこともありました。

そこで、桶川宿の人びとは、安心して暮らせるようにと中山道の真ん中に市神社（いちがみしゃ）を建て、神様をまつるようになりました。この市神社のおまつりが「祇園祭（ぎおんまつり）」です。

市神社をまつってしばらくたったころ、台風による大水害が関東地方をおそいました。荒川や元荒川に近い桶川も大きな被害をうけ、祇園祭も開けなくなってしまったようです。

市神の前に暮らす宗三郎さんが、なかまと相談しています。

「このところ、大雨が降り、作物が実らなかつたりして、困ったものです。」

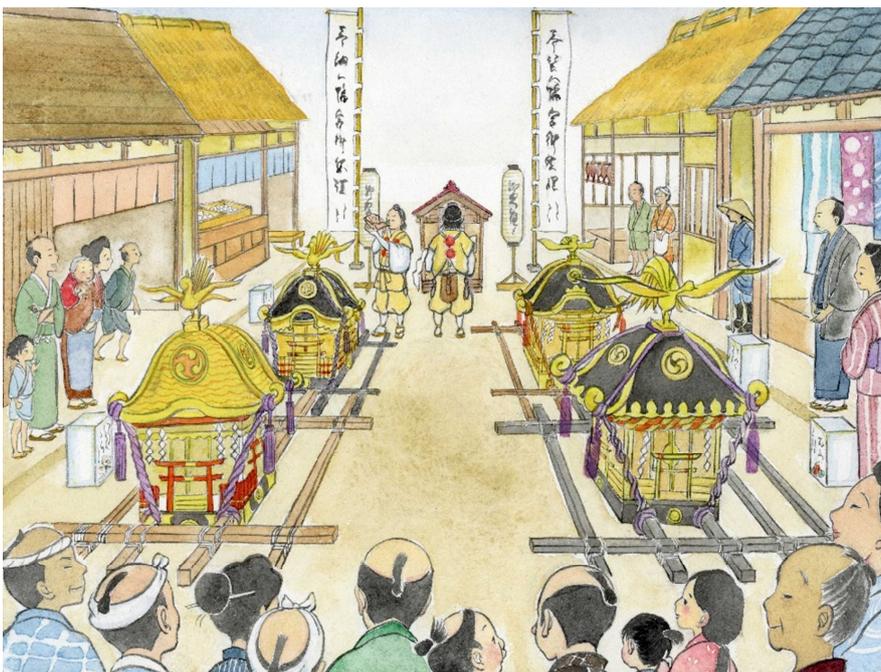
「市神様のお宮に灯ろうをかざってお祭りをしてから、もう 10 年がすぎました。どうだろう、町のみんなが元気になるようにもっと盛大にお祭りをしてみてはどうだろうか。」

「江戸では、夏の祭りに神輿（みこし）を元気にくりだすそうだ。」

「市神様は、にぎやかなことが好きな神様だから、桶川でも、来年、寛延 2 年（1749）の祭りまでに各町内で神輿を作って、中山道をねり歩こうじゃないか。」

仲間たちも、みな楽しみだと賛成してくれました。

さあ、みんなで祭のしたくをはじめよう。



〔町探検〕

○市神社

市神社は、明治時代になると中山道から稲荷神社に移されました。「八雲神社」がそれです。



紅花（べにばな）がもたらされたころ

桶川の紅花作りは、今から200年ほど前からはじまります。このころまで、紅花は今の山形県で多く作られ、これを原料として京都で染め物や口紅が作られて全国に売られていました。

桶川宿のとなりにあたる上村（かみむら）の七五郎さんは、江戸の柳屋（やなぎや）がもってきた種をまいて紅花をそだてたと記録されています。柳屋は、江戸に近いところで紅花を育て、口紅を作ろうとしたのでしょう。

天明3年（1783年）に浅間山がふん火して、桶川でも畑が火山灰におおわれ、作物がよく実らなかったそうです。また、桶川宿では、たびたび大火事がおこり、たくさんの家が焼けてしまいました。

人びとは、すこしでも暮らしを豊かにしようと、それまで作ったことのない紅花作りにはげみました。やがて、紅花は、桶川だけではなく、中山道に近いところでたくさん作られるようになりました。



農家の人びとは、つみとった花を乾かして、「紅もち」を作りました。この仕事は、むしあつい季節のつらい仕事だったそうです。

それでも、畑が多く、お米があまりとれない桶川では、高く売れる紅花は暮らしを豊かにする欠かせない作物だったのです。

農家で作った紅もちは、桶川宿の商人が買い集め、江戸の商人をとおして京都へと運ばれていきました。

紅花作りが始まって30年くらいたったころには、桶川の特産物として知られるようになりました。『このごろ、多く紅花が育てられるようになって「紅もち」が作られるようになった。町のまわりの人びとはこれを「桶川臍脂（おけがわえんじ）」と呼んだ。』と記録されています。



となり村の七五郎さんの畑に、桶川宿の木島屋さんと江戸の柳屋さんがやってきました。木島屋の主人である源右衛門（げんえもん）さんが声をかけます。

「七五郎さん、冬にまいた紅花がみごとにさきましたね。」

「柳屋さん、山形では、春にまくそうだが、こちらでは麦と同時にまくように工夫したのですよ。」

七五郎さんは答えます。

「浅間山の灰が畑に降ってから、畑がだめになり、紅花ですが、うまく育てて売り物になればよいのですが。」

柳屋さんが笑いながら、言いました。

「京、大阪では、紅花がとびように売れているそうですよ。このできなら、大丈夫ですよ。」

紅花とともにさかんになったお祭り

桶川臘脂（おけがわえんじ）が特産物だと記録されて間もない天保（てんぽう）4年（1833年）から天保7年（1836年）は、寒く作物が実らず、人びとはたいへんな苦勞をしたそうです。

作物が実らないだけでなく、お米の値段も高くなり、食べるものに苦勞した人びとがたいへん多かったと伝えられています。江戸幕府（えどばくふ）は、お米などの値段をさげるために、だれでも自由に商売をしてよいと日本中のみんなに知らせました。

それまで、江戸の商人に紅花を売っていた桶川宿の商人は、京都の商人に紅花を送るようになります。これは、京都には紅花を使って口紅（くちべに）を作り、赤く布を染める仕事をする人たちがたくさんいたからです。

やがて天気はもとどおりになり、桶川宿には、まわりの村々から紅花や農作物がどんどん集まってきました。

このころ、紅花の生産量は、山形に次いで全国第2位になったこともあります。

豊かになった桶川宿では、桶川祇園祭がますますさかんになりました。天保9年（1838年）6月に市神社は建て直されました。紅花や麦などの作物の商売で得た豊かさをもとにして、お神輿（みこし）や山車（だし）を作り、本街につたわる大きな「夫婦獅子（めおとじし）」もこのころにできあがったようです。



桶川宿の店から出荷される紅花



[町探検]

○紅花商人寄進の石燈籠（べにばなしょうにんきしんのいしどうろう）

稲荷神社の社殿の前にある大きな石燈籠は、安政（あんせい）4年（1857年）に紅花商人たちによって建てられました。

台座には、「紅花商人中」と刻まれ、その下に、24名の紅花商人の名が刻まれています。なかでももっとも多かったのが桶川宿の商人で、ここが紅花取引の中心地であったことを伝えています。



和宮様のお泊まりと桶川宿

今からおよそ160年前の文久（ぶんきゅう）元年（1861年）、江戸の将軍である徳川家茂（とくがわいえもち）に、天皇の妹である和宮（かずのみや）様が京都からおよめ入りすることになりました。

和宮様は、10月20日に京都を出発し、行列を組んで江戸へ向かって中山道を進みました。たくさんの人やものを運ぶ行列は、江戸時代で最大のものとなりました。京都から江戸までの旅は25日かかり、ここ桶川宿にも宿泊しています。

和宮様の一行は、11月13日に桶川宿に到着しました。

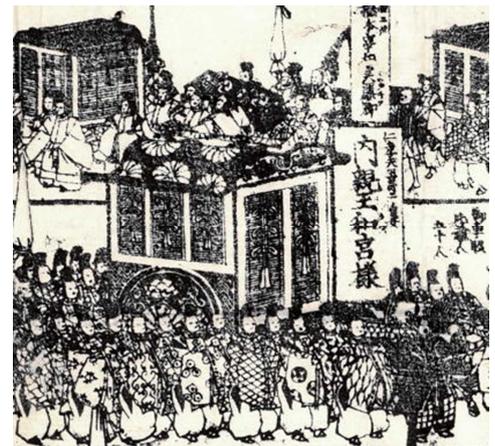
桶川宿のすべての家には、この大行列の人びとが泊まりました。また、桶川宿には、大行列の荷物を運ぶ人が36450人、馬が1799頭も集められました。

翌日の朝早く、和宮様の大行列は、江戸に向かって無事に出発しました。

このように、桶川宿とまわりの村の人びとは協力して、江戸時代の最後に起きた大行列の通行を成功させたのです。

このできごとから間もなく江戸時代は終わり、1868年に明治時代が始まります。

大名行列もなくなり、中山道を行きかう人や馬は少なくなり、やがて、鉄道が人や物を運ぶようになりました。こうして、300年も続いた中山道桶川宿のやくわりは終わります。



和宮様を乗せた車

桶川宿で旅人の宿（やど）と、紅花を買うことを仕事にしていた孝治郎（こうじろう）さんは、にぎやかだった宿場町のむかしをふりかえています。

「外国から赤い染料が大量に安く入ってくるから、紅花なんて手間のかかるものは見向きもされなくなってしまった。しかも、鉄道がはしるようになると、人が通らなくなって、宿泊客もさっぱりだ。紅花もだめ、宿屋もだめ、これからどうやって暮らしたらいいのだろうか。」

町の歴史をふりかえってみると

桶川の町をつくり上げてきた人びとの歴史をふりかえってみると、何度もあった苦しいできごとを乗り越えてきたことがわかります。

紅花作りも、浅間山のふん火や桶川宿の大火といった苦しいでき事をのりこえるなかで始まりました。人びとは努力し、町のくらしが豊かになると、お祭りはさかんになりました。

桶川の祇園祭（ぎおんまつり）が始まった江戸時代が慶応（けいおう）4年（1868年）に終わり、明治時代が始まります。

中山道の交通をささえた桶川宿もやくわりを終え、鉄道が人や物を運ぶようになりました。明治18年（1885年）には桶川駅が開かれました。

また、中山道桶川宿から京都や大阪に運ばれた紅花も、外国から日本に入ってきた新しい染め物の材料が使われるようになり、作られなくなりました。

それでも、明治時代の桶川町は、大麦や小麦、サツマイモがたくさん集まる町として栄えました。質の良い桶川の麦は、桶川駅から全国へと出荷されていきました。

いそがしい麦の仕事が終わると桶川祇園祭です。町の人びとばかりではなく、桶川町全体の人びとがお祭りを楽しみにしていました。

みなさんのおじいさんとおばあさん、お父さんやお母さんがくらしした桶川の町の様子は今とはずいぶんちがいます。

昭和時代になると大きな工場ができて、桶川に住む人たちが増えていきます。

そして、昭和45年（1970年）には桶川市が誕生します。祇園祭りの子供ばやしがさかんになったのはこのころです。

どの時代でもお祭りは、みんなが力を合わせて立派なものとなります。子どもみこしに集まるみなさんのがんばりも、桶川の歴史として、未来に伝えられていくのですよ。



明治時代の桶川駅



明治時代の祇園祭と子どもたち



子どもみこし